

# 宮城知事やガンバレルーヤのよしこを襲った下垂体腺腫

## 視野障害やホルモン異常分泌は手術

宮城県の村井嘉浩知事が今年4月、脳の「下垂体腺腫（せんしゅ）」で経鼻的内視鏡手術を受けたとの発表がありました。腫瘍は約3年前、人間ドックで見つかり、当初は経過観察していました。しかし、下垂体ホルモンの影響でむくみや指の関節痛、睡眠時のいびきなどがあり、将来的なリスクを考慮して手術をしたとのこと。お笑いコンビ「ガンバレルーヤ」のよしこさんも過去に下垂体腺腫のため手術と治療を受けたことを公表しています。

そもそも下垂体はどんな器官なのでしょうか。下垂体は、脳の真ん中下（脳底）の頭蓋骨のくぼみにある1センチ弱のホルモン分泌器官です。下垂体の前方部分（前葉）からは成長ホルモンや乳汁分泌に関係するプロラクチン、さらに副腎皮質刺激ホルモン、甲状腺刺激ホルモン、性腺刺激ホルモンが分泌されています。後葉からは体内の水分バランスを調整する抗利尿ホルモンが分泌されており、下垂体は全身の内分泌機能の指令塔です。

下垂体腺腫の発症率は10万人当たり年間10人ほどですが、近年急増しています。理由は、頭痛やめまい、検診などで頭部MRIを撮った際に、偶然に無症状の小さな偶発的下垂体腫瘍が見つかるためです。

よくある症状は、下垂体のすぐ上を、目から脳に行く左右の視神経が交差して走行しており、下垂体腺腫が大きくなり神経を圧迫し起こる視野障害です。それ以外で多い症状は、顔つきの変化と女性では月経異常や乳汁分泌です。

下垂体腺腫が疑われると前葉の5つのホルモンの基礎値と、副腎皮質ホルモン、男性ホルモンや女性ホルモンなどを測定します。同時に下垂体を中心に造影MRI検査をします。腫瘍が視神経を圧迫している場合は眼科で視力や視野を測定します。

### ■下垂体は内分泌機能の司令塔

下垂体にできる腫瘍のほとんどが腺腫で良性腫瘍です。一般的に良性腫瘍は積極的な治療をせずに経過観察します。ただ、下垂体腺腫にはホルモンを分泌する機能性腫瘍があり、ホルモン過剰による症状がある場合や、腫瘍の大きさが10ミリを超え、視神経を圧迫し視野障害や頭痛が起きたり、正常組織が圧迫されたりして、下垂体機能が低下する場合は手術をします。

手術の目標は、ホルモンの正常化と症状の改善です。下垂体の位置が鼻腔（びくう）の斜め上なので、小さい腫瘍は鼻腔を経由する経鼻的内視鏡下手術で腫瘍摘出します。手術単独での目標達成率は8割ほどです。

手術を受けた下垂体腺腫の半数から 3 分の 2 はホルモン過剰症状のない非機能性腺腫で、残りがホルモン過剰症を伴う機能性腺腫です。

機能性腺腫でいちばん多いのがプロラクチンを分泌するプロラクチノーマです。この腺腫は若い女性に多く、下垂体腺腫の 3 割ほどを占めます。症状は乳汁分泌や月経不順などで、不妊の原因にもなります。プロラクチノーマの場合、プロラクチン分泌過剰症のみの場合は、まず薬で治療します。

2 番目に多い機能性腺腫は成長ホルモン産生腫瘍です。この腺腫は中高年の男女に発症し、下垂体腺腫の 1 割弱です。過剰な成長ホルモンの影響で、高血圧や糖尿病、脂質異常症を発症しやすく、軟部組織や骨の肥大で関節の痛みやむくみ、上気道狭窄（きょうさく）に伴ういびきなどの症状が出ることがあります。